参考資料２

第１回、第２回明日香村小委員会における各委員からの指摘事項等

（資料７「明日香村小委員会報告（案）」に沿った整理）

※文末[1]は第１回、[2]は第２回の指摘事項等を示す

１．これまでの取組みの評価に関すること

①５年前と比べて整備等が驚くほど目に見える形で進んでおり、スマートフォンアプリにより、非常に見やすく分かりやすい形が作られるなど、徐々に良い状況が生まれつつある。[1]

②東京で行われたキトラ古墳壁画展は大変な盛況ぶりであり、国内外から多くの関心が寄せられている。[1]

③15 年前は 7～8 軒だった飲食店が 40 軒ほどに増えた。レベルがかなり高く、リピーター客がついていて、いつも混み合っている店がある。[1]

④人口減少の問題など、村の活性化の速度が遅い。子供の教育支援策が奏功し、子育て世代が戻ってきているが、2035 年の人口推計では、14 歳までの人口が現在から 3 分の 1 くらいに減る。整備が進み条件が恵まれているにも関わらず、人口が減る原因が何なのか考えないといけない。[1]

２．当面取り組むべき施策のあり方に関すること

１）歴史展示の推進に関すること

①日本だけでなく世界の財産であることを、より広く理解してもらうためには遺跡の一部を復元してスケール感などが分かるようにするとともに、ビジュアルで分かりやすく説明し、さらに村民が十分に誇りと認識を持たないといけない。[1]

２）歴史的風土の維持・向上に関すること

①国営公園から出た途端に隣にある駐車場のひどい光景が目に入る。公園の敷地外であっても国と村が連携して景観を守ってほしい。[1]

３）観光・交流の振興に関すること

①レンタサイクルは自由に乗り捨てができて、情報を得ながら周れるシステムにはなっていない。また、自転車道と歩道が十分に整備されていないので、非常に危険な場面があり、楽しく巡るような仕掛けになっていない。[1]

②中心部の周遊は４㎞ほどで距離的には良いが、途中にステーションがないので、暑い日は日陰がなく、雨の日は雨宿りの場所が十分とは言えない。[1]

③住民になったような気持ちで、暮らすように旅をするための設えやもてなしの対応が不十分である。[1]

４）住みたくなる村づくりに関すること

①小中学生に対する地域学が誇りを育て、観光客に対してガイド経験を積むことで人間関係調整能力を養っている。また万葉集や明日香に関する歴史を英語で説明できるようになれば、様々な場所で外交官として活動することができる。そうして将来的には村に帰ってきてもらうという長期的な視点がある。[1]

３．将来的な取組みのあり方に向けた今後の議論の方向性に関すること

１）明日香村の価値の捉え方に関すること

①明日香村の価値を様々な観点から絶えず検証する機会を持ち、常に高い次元で国際的な観点から捉えていくことが大切。[2]

②四季と共生する生活と歴史資産が共存していることに価値がある。そこに世界との交流の文化を加味して主張していかないといけない。[1]

③考古や歴史の分野だけでなく、万葉集の世界を上手に取り込まないといけない。詩を詠むことが心の支えとなり、それをずっと残していることは日本の特徴であり、感性的なものを風土と結びつけ、具体的な場所とつなぎ合わせることで、いろいろなことが説明できるのではないか。[2]

④万葉集が世界的にみて素晴らしいのは、身分や性別に関係なく誰もが詩を詠めたという文化水準の高さや平等意識の高さ、それを今に残し続けているすごさにある。日本人が根本に持っている民主主義的な意識が表されているとも考えられ、日本人として胸を張れる文化資産としてもっと強調すべきではないか。[2]

２）明日香村の歴史的風土保存のための枠組みに関すること

①これまでの土地利用規制に対する支援という考え方ではなく、規制があったからこそ価値を生み、それが実感できる時代に来ているという認識を持つべき。[2]

②欧米で買取請求権がなくても規制を当たり前に行うように、地域の価値が高まることをありがたいと思える方向に持っていくべきではないか。[2]

③明日香村は隣の高取町と比べて実勢地価が相当高いが、買入制度が地価を下支えしている一方で、土地の需要が大きいという一面もある。[2]

④土地利用規制については、大字景観計画や都市計画法第 34 条 11 号などで地区に合わせた調整を行うことで、価値を高めることにつながるのではないか。[2]

⑤昨今の住宅事情を背景に、土地利用規制による建築費用の負担増が村外への転出に影響しているという現実を忘れてはならない。[2]

３）地域住民及び国民の理解協力・積極的な関与に関すること

①村民が村の保全や発展に対して誇りを持つことは非常に重要。若者の村づくりへの住民参加が誇りを醸成する段階まで行き着いていないのではないか。[1]

②村民は自分の集落に対して根強いアイデンティティを持っているため、大字ごとの世界を創ることから積み重ねることで賛同を得られる。[2]

③明日香村民のこれまでの取組みや、それに対する課題を基にした上で、行政からの手助けをするという内容でなければ、村民のやる気が感じられないものになってしまう。[2]

④交付金の 4 分の 1 は大字の活動を支えているが、これまで維持されてきた地域の活動は明日香法をはじめとする仕組みの成果である。[2]

４）地域産業振興による地域活力の向上に関すること

①遠い、変わらない、見るもの・買うもの・食べるものがない、夏と冬は厳しいというマイナスキャンペーンを払拭しないといけない。また、周辺市町村と広域的な観光システムを考えていかなければならない。[1]

②奈良や飛鳥のものは東京で大変な人気がある。しかし、それが来訪に結び付いていないのではないか。あるいはもっと大勢に知ってもらう作業が足りないのではないか。遠方の人たちが関わることができる仕組みがあるといい。[1]

③万葉集に入っている二上山や飛鳥川などの地名をもとに、今の風景と結びつけて物語を感じることで理解を深め、歌碑を巡るツアーなど観光を通じて文化を再興できるといい。[2]

④万葉集の本質的な価値を多くの人に知ってもらうために、学校教育で扱うだけでなく、海外にも訳してアピールできるといい。他地域との連携や、「私からあなたへの万葉集」という現代語で普通の生活のありがたさを表現する取り組みも主張していく必要がある。[2]

⑤今の観光のあり方とは、素晴らしい環境の中で自分が主役になり演じる行為にある。そのためには素晴らしい環境づくりと多様な魅力が必要であるが、明日香村の集落には山の中から平野まであり、とても魅力がある。[2]

⑥かめバスには乗ってみたくなるデザインや、特徴的なガイドなどの仕掛けがほしい。それに加えてバーチャル体験のような深い観光につながる仕掛けがあると、明日香の観光がもう少しよくなる。[1]

⑦観光に対して庁内体制を整えつつ、外部の専門家との連携を図りながら取り組みを強化していくことが大事。[1]

５）歴史的風土を支える担い手の育成と確保に関すること

①飛鳥に都があったという価値を認識し、農業や観光だけではないライフスタイルを上手く表現し、選ばれた人に住んでもらうという観点で住みたくなるビジョンを戦略的につくることが、安売りしない明日香として大事ではないか。[2]

②改修された京町家が高価格でも若い人から人気があるように、明日香村の新しいライフスタイルに合った住宅のあり方や景観のあり方について検討することが必要ではないか。[2]

③観光と農業だけでなく新しいターゲットや人を入れることで、Ｉターンや Ｕターンを呼び込める。そのとき、新しく住む人が集落のコミュニティに最初は属さなくても暮らすことができるといい。[1]

④若者が転出するのは、将来に対する展望ができないからではないか。若者が明日香村で生活する基盤をどう作るかが課題。外部からの転入や村外者の活動参加も１つだが、地元で育った人が住み続けてもらうのが一番である。[1]

⑤村民が住み続けたい村と、外の人が移り住みたい村は観点が違うため、それぞれの考えの整合を取り、しっかりと対策を講じることが必要である。[2]

⑥集落の人間関係が濃密なために苦労を感じて出ていく人が実際にいる。転出を止め、30～40 代で帰ってくる仕組みを教育や医療、雇用の場などで作っていけるよう、定住や地域活性に関する情報提供や支援が必要である。[2]

⑦明日香村を守ってきた人たちや担い手が減っており、このままでは継続することが危ぶまれる。観光まちづくりなどを進めながら、担い手を確保していくことが大事である。[2]

⑧子育てにこれほど適した環境は他にはないため、移住や定住につなげるためにも教育に力を入れることが必要である。[2]

⑨明日香村で就農を希望する人は多く、順番待ちの状態であると思われるが、家を借りても農地が借りられない、またその逆の状況も多々あるため、暮らしやすくすることが必要である。[2]